国際高齢者年を迎えて
交流が生む理解と協力

樽　田　　修

本年（1999年）は，国際高齢者年である。わが国ばかりでなく，世界の先進諸国の高齢化の進行は著しいものがある。1991年に国連で採択された高齢者のための国連原則は，周知の如く，高齢者の「自立」,「参加」,「ケアー」,「自己実現」,「尊厳」を五大柱としている。即ち，高齢者が仕事や，その他の手段で収入を得ることができるよう,「自立」を目指した社会づくり，また，彼等が政策決定や，地域やボランティア活動に「参加」できるようにする。すべての高齢者が医療や介護を受けられるよう「ケアー」の実現に努力する。高齢者が自分の可能性を見出し「自己実現」できるよう援助する。高齢者が，肉体的又は精神的な虐待に遭わず公平に扱われるよう「尊厳」の確立に努めるという五つの柱の樹立を目指している。そのためには,「すべての世代のための社会をめざして」がメインテーマである。これは，1986年の国際障害者年の「完全参加と平等」,ノーマライゼイションの社会，インテグレイションの社会を目指した取り組みに劣らず人類生存の根源を問う重要な行事であるが，この国際高齢者年は，高齢者のための，高齢者によるキャンペーンではない。

国際高齢者年を契機に，幼老，中高一体となった「すべての世代のための社会を目指して」の交流の本格的な取り組みが，いま程待望され，期待された時代はかつてなかったのではないだろうか。人間の優しさや，心の暖かさは，深い交流を通じて理解を深め醸成される。

交流は相互の理解と協力

最近，高齢者と児童の交流が積極的に進められ，保育園，幼稚園をはじめ，小中学校，高校等でも，近くの老人福祉施設の慰問や，行事への参加，地域の老人の皆さんから，伝承を聞いたり，わら細工や，花づくりなどにも参加する児童が多くなってきている。

いま，わたしの勤務校の女子短大の幼児教育科生でも，その１／３以上は，中学，高校時代に，老人ホームを訪問したり，福祉施設でボランティアをしたり，交流をしたことがあるという。

しかし，定期的に，計画的に継続的にボランティアを行い，老人や，障害児者を友人として交流を続けているものは意外に少ない。交流を阻害しているものは，時間の制約，関係者の受け入れ態勢の未整備，生徒やリーダー等の意欲，力量，価値観等が考えられるが，今後，工夫や改善すべきことが少なくないと思われるが，ここでは，児童と高齢者が，毎日交流を行い意欲的な取り組みをしている主として本県の例を２～３ご紹介したい。

毎日が交流の保育園

長野県上水内郡鬼無里村立中央保育所

鬼無里村は，長野市から国道406号線を西へおよそ20km，冬季オリンピックのジャンプが行われた白馬村との中間にあり，標高700mの役場を訪問すると，失礼ながら，古めいた民家程度の建物であり，数名の来客があれば，庁舎が一杯になり，座る場所もない。駐車場も数台の農業用軽トラックで満車になってしまう。昭和25年代の最盛期には，6209人を数えた人口も，現在，2427名であり，高齢化率37％の過疎の村である。

戸谷庄一村長を先頭に，全職員，村民が一体となって，超高齢社会への取り組みを果敢に進めており，その先見性，意欲，熱意，民度のいづれからも，学ぶものが少なくない。（庁舎は明年新築の予定である。）

施設の複合化

小さな綜合大学を目指す

往時，村内には，中央，東，西の小学校が独立して存在したが，昭和56年に一校に新築統合された。保育所は，上里，中央，両極の３園があり，定員総計155名であったが，実措置児が，35名まで落ち込み，総合して運営せざるを得なくなった。

平成３年～４年，村が，総力を結集して，本県では初めての複合福祉施設を建設した。年間総予算40億円の超過疎の小村で，実に18億円の総事業であったという。いくら，国や県の補助金や交付金があったとはいえ，福祉にかける意気込みのすごさ壮大なる将来計画には感動し脱帽を禁じ得ない。

一階は，保育所，二階はコミニュティセンター（高齢者生活福祉センター），デイサービス，Ｂ型，Ｅ型，ショートステイ（定員８名）障害者等共同作業所，三階は，老人と障害者の福祉住宅（単身者用12戸，夫婦用２戸）である。

村営保育園の現状

鬼無里中央保育園は，村内３ヶ所の保育園を平成７年統合して誕生した。定員45名，実措置児数49名（未満児１，３才児18名，４才児15名，５才児15名），１時，32名まで落ち込んだ園児が，過疎の中にあって，わずかだが，年々出生児が増えている。その主因として考えられるものは，公営住宅28棟，村営住宅16棟，特定公共賃貸住宅３棟の村民外への解放であり，高度の活用である。ユーターンばかりでなく，都会の出身者が定住するアイ・ターンも報告されている。

人口の減少から，横ばいに転じ，ようやく上昇の気配となってきていると村の幹部は希望を

語ってくれた。

交流の方法

園児は，毎日午後２時30分～３時まで２階のデイサービスセンターの皆さん，ショートステイ時には，共同作業所や福祉住宅に散歩に行くものもあるという。

デイサービスセンターは，Ｂ型，Ｅ型が併設されており，送迎による出席率は高く，ショートステイを加えると，ほぼ毎日30名を超す利用者がある。未満児や，不慣れな幼児の園児は職員が案内して行くが，他は全く自由に進んで出かけて行く。各階は，全く解錠されており，室内からも，二階，三階の玄関からも通路は全く自由である。高齢者たちも，園児を歓迎する心の準備をしており，園児と一緒に童謡を歌ったり，肩たたきに目を細めたり，中には，手をつないで散歩なども見られる。

毎日の児童と老人の交流は，自然の流れとなっており，彼らの間には，歓声と笑顔が絶えない。また，毎月一回は，年間計画に従って全員の交流が行われている。誕生会（毎月），カルタ大会（１月），節分（２月），ひな祭り（３月），春さがし（４月），お花見（５月），花しょうぶ園見学（６月），七夕（７月），ゲートボール大会見学（８月），ミニ運動会（９月），やきいも大会（10月），誕生会（11月），クリスマス会（12月），自由保育の時間に年長児が見当たらないので探すと，デイサービスで遊んでいたり，利用老人たちが，直接園に見え園児たちに歓迎される風景も見られる。

佐藤長子園長さんは，園児たちが，確実に優しさと，いたわりの気持ちが成長していると目を細める。

複合センターの原山良二次長さんは，「子供に接すると，お年寄りは，とても元気に，また明るくなる。」とうなずいている。わたくしは，鬼無里村の複合施設に注目し，時々，ここを訪問しているのであるが，年長児（男）のお母さんに，「毎日が交流」の効果を聞いたことがある。子供に熱があり，風邪気味なので，「今日は休んだら」といった。「今日は約束したおばあちゃんに会う日なので休めない」という。私の家にはお年寄りがいないので，どういう様に挨拶したら良いか緊張しますが，子供のほうが，知らないお年寄りにも，気軽に挨拶して，びっくりしたことがあったという。

鬼無里中央保育園では，３つの挨拶を園是としている。①朝，昼，晩の挨拶，②暖かい人間関係を深める挨拶，③いたわりと，思いやりのある挨拶である。だれも鬼無里村を訪れるものは，小中学生をはじめ，見知らぬ村民も，実に気持ちの良い挨拶や，会釈をしてくれる。すぐ暖かい気持ちになれる。また村の老人クラブでは，年２回村内の児童を招待して，定期的な交流を続けている。餅つき大会と，部落の祭り行事である。

戸谷庄一村長の言葉を借りると，高齢者が多いということは長寿の村であるわけです。長寿の村は，高齢者や障害者を持った方々が，安心して村で暮らせることができる環境をつくることが，村として一番大切なことだと考えております。どの様な有能，卓越した村長さんでも，

それを支える村民の意識，理解，民度が高く，信頼の支えが無ければ，大事業はできない。

鬼無里村は，高冷，過疎の山間地にあるが，かつての日：それは400年間といわれる長い間，即ち，江戸時代から，明治，大正，昭和30年代までは，信州を代表する麻の栽培地であった。化学繊維の出現するまでは，麻は衣類のほかに，畳やロープに加工され，養蚕以上の安定した高収入を得ることができた優秀な特定作物の代表であった。麻を栽培し，一貫して，製品に加工する高度な技術の研究や創意工夫，付加価値を生み出す販売組織の研究等あらゆることに村民が前向きであった。同村の歴史民族資料館には，村が生んだ江戸時代の和算学の大家，寺島宗伴の資料や遺品，彫刻の，精を極めた祭り屋台や神楽が保存されており，明治の初頭，村の先人たちは，生糸や大麻の浜相場に深い関心を持っていた記録が残されている。

鬼無里村の皆さんは，世界の動きに敏感である。高齢社会は人間が長い間求め続けてきた成熟社会の到来であり，明るく，広く，絶えざる建設的社会であることを知っている。そして，全ての世代を超えた深い人間的交流，相互理解が新しい時代の総てを決定し，源泉となることを知っている。

前述した如く，鬼無里村は，人口2,427名の過疎の小村である。その村の中心部，複合施設の隣接地に，モダンな喫茶店がある。村立民営のコミュニティーセンター「わかもの」である。地下足袋の老人が，農作業の帰りに，一杯300円のコーヒーをゆったりと飲んでいる。彼らの目は人間を信じきった目であり，若者大好きな目である。みんな生涯現役である。

村営「鬼無里寮」

鬼無里村は，村民挙げて，人材の育成の援助，支援に情熱を傾けている。子供はみんな村の子供である。老人は村の宝である。村民は村そのものである。鬼無里村は，長野市内に，村直営の「生活寮」を経営している。いまでは老朽化が進み，築百年を超すのではないかとさえ思はれる「鬼無里寮」は４畳半から，七畳までの13室があり，高校生専門学校生が，いま14名が入居し生活している。（姉妹一組）

村民の子弟の教育を安心し，低額で就学出来る様村が直営で運営しているのである。

鬼無里寮は，村民の素泊りも可能であり，村民の物資の一時保管や，県庁や長野市との外交公館の役割も担っているのである。

本気で協力し合えば，県や国が出来ないことでも，小さな村が，成し得ることを教えている。私たちは，鬼無里に学ぶものが少くないことを知るべきではないだろうか。

小・中学生の交流

垣根の無い特養―豊野清風園

長野県の北部に位置し，南は長野市，千曲川を境に，小布施町，中野市に接した人口9818人のリンゴ，ブドウなどを特産とするまとまりのよい町である。町村には，中学１校，小学校２

校がある。

新旧児童会代表が施設で挨拶

豊野中学校では，生徒会の新旧役員が交代すると，直ぐ，特別養護老人ホーム豊野清風園に挨拶することが，誇りある伝統となっている。

今度，会長になりましたＡですが，よろしくお願い致します。副会長になりましたＢですがよろしくお願い致します。会計になりましたＣですがよろしくお願い致します。続いて，旧役員も一人づつ丁寧に挨拶し，各部屋を廻って，名残を惜しむ，利用者達も，ベットに起きて，それぞれに本当にご苦労様でした。Ｄ君ありがとう。Ｅさん，Ｆさんと自然と実名が飛び交う。

いま，長野県下には，26ヶ所の養護老人ホーム，88ヶ所の特別養護老人ホームがあるが，小中学校の生徒会や児童会役員が，就任，離任に必ず施設を訪れ，全役員で各室ごとに，利用者に心暖かい挨拶を続けている学校は，私の知る限り，ここだけであり，全国的にも少ないのではないだろうか。

特別養護老人ホーム豊野清風園の70名の利用者と，地区の小中学校は，見事なまでに，心が通じ合っており，これは，親や教師が，強制したり，強要したりしたものではない。

同施設は，「愛と奉仕」を実践している福祉法人賛育会の経営である。周知の方も少なくないと思うが，都内墨田区を中心に，大正時代より，東大新人会を中核に，貧困の解消と教育の充実，医療の改善―いわゆるセツルメント運動（地域改善運動）の献身者たちが，戦災で医療施設の大半を失い，一部は豊野町に病院を疎開させ，医療の後進地域であった北信濃地帯の中核的医療機関として，地域の絶対的信頼と支持，理解を得てきた賛育会が，県下で最初に開設した特別養護老人ホームが，豊野清風園（Ｓ44開設）であり，豊野病院とは隣接した敷地内にあり，同地には，同一法人が経営する老健施設ゆたかの（100床）がある。

県下最古の特別養護老人ホームと豊野清風園は，建物の老朽化が進み，基準も古く，いま建替が進められているが，この古い建物の中で，どの様な新しい施設にも劣らぬ「人間性回復」のための様々な創意と工夫，実践と試行が毎日行われている。１つ２つ例を挙げると，痴呆老人のための積極的リハビリテーションの実施である。日常生活の中に歌やゲーム，スポーツを取り入れた工夫，「老化とは大切な人間の成長である」という視点から，利用者一人一人の老人に，励みとなる言葉や，賞状を送り，「人間の尊厳」を至上なものとしての処遇を一貫して続けている。

その１つに，「夢の実現」がある。これは施設利用者の夢を何でも聞いてあげ，実現させる努力を施設全体で行うというものである。例えば，本物の相撲を両国の国技館で見たいという希望があれば，主治医のＯＫさえもらえれば，施設の職員，看護婦，寮母，家族が同行できれば家族も含め，ボランティアの協力を得ながら，本当に見学に行く。重い利用者だと数名の応援が必要であり，全行程２～３日を要する場合もある。

七十余年前に一度会ったことがある従姉妹が指宿（いぶすき），鹿児島県にいる。直接会って別れの挨拶をしたい。

施設側では，関係福祉事務所の協力を得て，相手の意向，近況等を調査し，プロジェクトチームを組んで，この夢を実現させる。利用者達は，自分達の希望，願い，夢の実現に職員達が，万難を排して，必ず叶えてくれることを知っている。

豊野清風園は，特別養護老人ホームを越えた施設であり，限りなく家庭に近いホームである。施設の中には，一貫して愛と信頼と希望の清流が流れている。

このことを，町民も，利用者の家族も，町内の小中学生達も，よく知っている。

小中生は，極めて自然に施設に自由に出入りしており，入所老人―施設利用者達と楽しんでおり，だれも，自分達が，ボランティアをしているとか，特別なことをしているなどという気持ちが無い。

これが，特別養護老人ホーム豊野清風園の凄さであり，資産であり，ゆるぎない底力である。そこには，ボランティアを越えたボランティア，幼老一体の交流，施設を利用している寝たきり状態の老人達も主役であり，また，児童達へのボランティアなのである。特養豊野清風園は，閉ざされた異常な社会ではなく，限りなく，一般家庭に近づける努力を毎日続けられている。本当のホーム（家庭）を目指しているのである。だから，もし，利用者が，いま施設外へのお散歩を希望していれば，彼等の希望を最大限に叶えさせてあげる。一人，一人の希望を尊重した処遇―個別的対応のためには，法による最低基準充足のための職員の配置では，どの様にやりくりしても，個別的処遇ができない。日頃，施設に通う顔見知りの小中生と利用者達が，お散歩を希望する者がいれば，何時でも，小中生徒を全面的に信頼して，車椅子のお散歩や買い物を任せるのである。ここが，違うのだ。もし，万一街頭で事故に会ったら，誰が責任を負うのか，責任回避のための責任論は，ここでは聞かれない。一切の責任は，当然施設にある。一人一人の職員は，施設長になりきって欲しい。最終責任は，園長である施設長がとるので，多少，勇み足があっても，利用者のためになることであるなら，積極的にやって欲しい。どんなに慎重に注意を重ねても，事故が起こり得るのである。そして，どんなに優れた一人の職員より，子供達が，本気で，３人，４人と協力し合えば，安心で安全な仕事ができることを，賛育会（豊野清風園の経営法人）の責任者達は知っている。そのためには，車椅子の原理，操作方法の基本，寝たきり老人の取り扱い方法，彼等の心理などを，繰り返して実習させる。特に車椅子の昇降，操作には，慎重，細心の用心を教える。子供達に全責任を持たせながら，彼等に気づかれぬ範囲から，万一のアクシデントに即応できる様見守っているのである。特別養護老人ホーム豊野清風園では，三十余年間，小中学生による車椅子のお散歩で，一度も事故が無い。そして，小中学生は，協力し合えば，どんなことでも自分達にできることを知って，自信を持つことができる。そして，重い施設利用者のお年寄りも，皆，本気で，精一杯生きていることを改めて知り，命の重さ，大切さは，男も女も，若者も，お年寄りも，全く同じなんだと実感せずにはおれぬのである。

老若の交流は，お互いの深い理解と信頼を深める。「分かち合い」―とは，お互いの命の重要

さを知ることである。

長い間，老人福祉施設やホームでの生活を余儀なくされている老人に若い友人がいる。子供達も，自分達を信じ頼りにしてくれる老人がいる。お互いに何という大きな資産だろう。

小中学生の生徒会の交代に，新旧役員が全員で，特別養護老人ホームの，個々の居室に挨拶して歩く。それが自然となっている。酒井京子園長さんはじめ，職員の皆さんと時々話す機会があるが，かつて，次の様な話になった。1998年，冬季長野オリンピックは，ウィークポイントとして，大切な資料や，帳簿類を焼却し，不可解な面も残したが，もし，成功した点，グッドポイントがあるとしたら，一校一国運動，一店一国運動を挙げることができるのではないかと，一周知のように長野市では，市内の全小中学校等76校が，長野オリンピックに参加を予定している国の中から，一校ごとに応援する国を決め，子供達が自ら学習を進め，相手国の風景や暮らしを題材としたレフリーを作り，各国の相手国がオリンピック村に入村する際は，その国を応援する学校が出席し，その国の国歌を歌ったりプレゼントを贈るなど，相手を大変感動させた。子供達も，直接，異文化に接し，学ぶものが少なくなかったと聞く。2000年のシドニーオリンピックでは，早速この長野の成果を取り入れていくことが決定され，次期冬季開催都市ソルトレークシティ（カナダ）ではもう取り組みが始められたという。この発想，理念を社会福祉の中にも，取り入れ，生かしていくことができないか，特別養護老人ホーム豊野清風園の目指すものは，総ての施設利用老人（入所者）を主役とすることであり，光を当てることである。

総ての世代の相互理解のための交流は，身近なところから，スポーツ，趣味，娯楽，音楽等から始められ，自然であり，持続するものから行われることが，大切ではないであろうか。

一瞬の歳月に思う

わたくしは，尾瀬が大好きである。残雪の中に吹き出すように水芭蕉が謳歌する春，日光キスゲが，高原や湖畔を黄原に一変させる初夏，清楚なワタスゲが風に揺れる秋，空まで燃える真紅の白秋，それぞれに美しく，心の癒し，安らぎを感じる。自然の偉大さ，深渕さ，改めて感嘆を禁じ得ない。

昭和30年の初めから尾瀬参りを毎年続けていると，長蔵小屋の主人平野さんをはじめ，尾瀬を愛する人達とも親しくさせて頂き，勤務校の学生を案内した所，大変歓迎され面目をほどこしたこともあった。

変わったものは何か

尾瀬は，比較的自然が守られており，あまり変わらないと山岳雑誌にでていたが，この40年間に私の目から見ても，ひどい変わり様である。湖畔の水芭蕉の巨大化は，年々異常である。水質の高富養化が主因であろう。日光キスゲには，油虫が天国の如く，自由に繁殖を続けてい

る。木道が整備され，都会から，気楽に行けるとあれば，毎年数十万人の老若男女が押し寄せてくる。どんなに注意しても人間が多くなると自然は壊されやすい。

さて，わたしはこの道を，居住している長野を経て鳥井峠―長野原―中野条―沼田を経て行くのだが，途中の長野原―中野条の山峡（やまかい）の何ヶ所かに，道路に面して，美くしい，実に良く手入れされた本格的なミニ花壇が散見され，元気の良いサルビア，マリーゴランド，ダリア，カンナ，けいとう，ひまわりなどが，通行人を心から歓迎してくれている。良く見るとそこには，黄揚羽，黒揚羽，モンシロ蝶，シジミ蝶，沢山の蜜蜂が乱舞しており，尾瀬の水芭蕉や，日光キスゲ，ワタスゲやあざみに劣らぬ美しさであり，見事な花壇であり，楽園である。

30年前には，見ることができなかった変わりようである。

平和の時代が来た

最近，道路の一部や，公共用地，駐車場の端にまで，ミニ花壇や，花園が多くなり，行政や，自治会，町内有志，老人クラブの皆さんが，積極的，意欲的に「花いっぱい運動」に取り組み，これを推進している姿が見られる。

信州においても，安曇野のレンゲ畑や，道を，赤，白の芝桜で彩り，サラダ街道とする通路には，年間を通じて，様々な花が栽培され，季節により植え変えられている。花を愛し，これを育て，皆で楽しむ，日本人にも，心のゆとりと，思いやりの心が広がってきている証として，嬉しく思われるが，上州路―群馬路は，信州路と一味違う感じがする。群馬路は，花壇や，花園に児童，育成会，地域と，長寿会，地区老人クラブの共同管理，共同栽培，共同経営の立札が見られる点である。

ある年の７月上旬頃だと思うが，１泊の予定で尾瀬に向かっていた。７月というと，遅い春の尾瀬も水芭蕉が終わり，日光キスゲが主役となる季節であるが，学生達の夏休み前の一瞬の静かな季節となる。

尾瀬への途中，わたしは，群馬街道で暑い日中，スコップや鍬（くわ），鎌や草刈で花壇の手入れをしていた多分老人クラブの方々と思われる数人の男女の皆さんを見かけたので，車を止め声をかけた。「暑いのにごくろうさんです。」，「きれいな花を見せていただいてありがとうございます。」と頭を下げた。彼等と直ぐ打ち解けて，苦労話を聞くことができた。種苗や肥料などは地区（行政）で補助してくれ，栽培や消毒や除草の管理は，地区の老人クラブが行い，毎日の水やりや，咲き終えた花の摘花は，地区の児童会で分担しているとのことである。花に劣らぬ協力の美しさである。

すごい先生達だ

元気で，きれいな花を咲かせるには，何よりも土作りが大切である。花や作物を作ること

は，土作りが基本であり，大切だと子供達に話している。毎年，土を耕起し，堆肥や，有機質をすき込んでも，良い土になるには３，４年はかかる。土地が団粒化し，土の中に十分空気（酸素）が無いと，良い花は咲かない。

老人クラブの皆さんは，汗を拭きながら話してくれた。

水くれも，直接冷水をやるよりも，２～３ヶ所に汲み置きした水の方を，花は喜ぶという。

群馬街道―上州路の，それぞれの地区のミニ花壇は，老人クラブ，長寿会，児童会，育成会と交流し合いながら，創意，工夫を凝らし花壇作りに励んでいる。誰が見ても素人の花作りの水準を越えた見事さである。花に若さがあり、元気が良い。

それは，カナダ屈指の花の宝庫とされるビクトリア州の名所となっているセメント王夫妻が，かつての石炭岩採掘場を花壇に代え，世界の名園として，ブツチャートの名を残している。あの花のように元気があり美しい。

老人クラブの一人は，そっと教えてくれた。美しい，元気な花を作るには，土作りと，咲き終えた花を，直ぐ摘んでしまわないと，種子に過大な栄養を必要とするので，親木が弱り，良い花が咲かないと。

すごい先生だ。何でも知っている。自然のうちに，高齢者と児童達が交流を行っている。理屈はいらない。花壇が，花園が，総てを語っている。

未到達の時代を迎えて

100年前，即ち19世紀のはじめ，人類の平均寿命は35才程度と推計されているという。2000年前，イエス・キリスト誕生の頃は，22才～23才位だったと推定されるという。

黄金のマスクで被われ完全な姿で発見されたツタンカーメンは，一般には，若くして夭折したと見られ，少年王ツタンカーメンと伝えられているが，当時の平均寿命の代表者と考えても，違和を唱えるものが少ないという。

今日の社会の際立った特徴を１つだけ挙げることが許されるならば，疑いも無く，高齢社会の到来であろう。

それは，津波のような破壊的エネルギーを持って，人間の根源を問うて止まらないのだ。

長寿は長い間，人類の夢であり，誰もが抱く願望であった。

過去2000年かかっても達し得なかった平均寿命を，わずか，100年間で軽く２倍以上に延ばし，更に寿命延長の記録を更新し続けているのである。いま，古い考え，古い生き方では対応できない新しい高齢社会の文化が求められているのではないだろうか。

高齢社会は，高齢者達が，若者のお荷物として，社会の進歩のブレーキとなるネクラな消極的社会となるのか，高齢者達が，六十年，七十年かけてようやく獲得した能力，技能，技術をはじめ，持てるものを社会に惜しみなく捧げ，高齢者が，若者たちの信頼と尊厳のうちに，その一生を閉じるのか，高齢社会は，ネアカで，人間をより幸せにし，万人を物心両面で，より豊かにさせるものでなかったら意味が無いのである。

ヘミングウェイの「老人と海」は，人世を広大無辺な荒海にたとえ，その限界に果敢に挑戦する徒手空拳の老人の死斗を見事に描き切っている。84日間，不漁続きであった老漁師を，人々は老化だと嘲笑し，軽蔑したが，少年マノーリンは，子供心に，老漁師に憧れ，尊敬していた。85日目，老漁師は，手こぎ漁船を上回る巨大な鮪（まぐろ）に遭遇して，３日３晩，不撓不屈，死力をつくし，遂に，この大魚をしとめることができたが，帰路，鮫の大群に襲撃され，巨大な鮪の骨格だけを持ち帰ったのである。

老人は，深い眠りの中にあった。３日３晩，飲まず食わず巨魚と戦い続けたのである。両手は裂け，血が流れ，骨さえ見える部分があった。少年は，愛する老人が，どんなにすさまじい格闘を長時間続けてきたか，そして勇敢に勝利したことを見たのである。

仲間や隣人から老化を嘲笑され，軽蔑されていた老漁師，サンチアゴ老人は，ただ１つ，少年マノーリンに見せたかったもの，それは，どの様な悪条件で，困難が多かろうが，人間が本気で立ち向かい，死力をつくすことができれば，最後まで耐えることができれば，重大な試練，困難にも打ち克つことができるのだ。―そのことを少年マノリーンに知らせたかったのだ。

「老人と海」は，マノーリン少年ばかりでなく今日に生きる総ての人に，人間の可能性と勇気を与えている。

人間が，英知を結集し，協力し合えば，高齢社会は，明るく，希望に満ちた豊寿社会にすることが可能である。

ノーマライゼイション（共生共存）の社会は，障害者の福祉の推進ばかりでなく，高齢社会の豊かなる開花のためにも，大切な理念であり，老若男女は無論，世代間交流，相互理解，相互交流が総ての前提である。

分かち合いなくして，優愛社会の実現は望めないのである。

参考にした資料

・「国連（ＵＮ）」季刊　日本国際連合協会
　特に№16号　テルマ・オコン＝ソロルナノの論文「国際高齢者年によせて」
・「国民の福祉の動向」（1998年度版）
　財団法人　厚生統計協会
・「全国市町村要覧」（平成11年度版）
　市町村自治研究会編（第一法規出版）
・「長野県市町村ハンドブック」（平成11年度版）
　長野県市町村振興協会
・「統計長野」（平成10年度版）
　長野県総務部情報統計課編（長野県統計協会）
・「長野県統計書」（平成11年度版）

長野県総務部情報統計課

・「鬼無里村村政要覧」（1998年度版）

・「写真集・鬼無里村の百年」（鬼無里村発行）

・「豊野町町政便覧」（平成10年度版）

・「豊野町誌」

・「The Old man and the sea」

Author: Ernest Hemingway　福田恆存訳　新潮社　昭和41年初版以来88版を重ねている。

「老人と海」（1952年）は、ヘミングウエイの生前に発表された最後の小説。